

第3章

地域のESDをサポートする “じくみ”

国内での ESD ネットワークづくり	58
地域ミーティング・地域ブロックミーティング開催地 ...	59
全国コーディネーターミーティングの成果	61
地域ミーティング開催報告	
旭川.....	64
青森.....	66
岩手.....	68
秋田.....	70
板橋.....	72
日野.....	74
泉北.....	76
香川.....	78
徳島.....	80
地域ブロックミーティング開催報告	
東海.....	82
北信越.....	85
全国ミーティング開催報告	89

地域ネットワークプロジェクト

国内での ESD ネットワークづくり

地域ネットワークプロジェクトチーム・リーダー 森 良

■地域ミーティング 3 年間の成果

ESD-J は、① ESD の理解をはかり、②地域や学校で ESD をどう広げていくかの戦略や方向性を議論することを目的に、2003 年から地域ミーティングの開催を呼びかけてきた(地図参照)。2005 年度末までの 3 年間で、27 都道府県 33 カ所で開催されている。

重点は、次第に①から②に移ってきているが、②の議論や実践をサポートするために 2005 年度から第 2 ステップとして、地域ブロックミーティングを開催することとなった。これは県レベルでの ESD の担い手がまだまだ少ない現状では、県を越える広域で地域の担い手が集まり、①、②についての議論を深め合う必要性があったからである。この事業は環境省の ESD 普及事業の一環として実施することができた。

北信越ブロックの担い手会議では、北信越地域での実践事例のリストアップとそのなかの適地に ESD スタディーツアーをすすめていくことや、これから地域ミーティングを開催する石川の担い手たちへのサポートをしていくことが話し合われた。

“地域発 ESD” を豊かに発展させていくためには、このような地域の核になる人びと（地域コーディネーター）がつながって、県や市町村レベルでの ESD 地域ネットワークづくりをサポートしていくことが大切だろう。

地域 PT の役割としては、現場に出向いてその地域ブロックの担い手とひざづめで地域展開の戦略を話し合うことが重要と考え、これまで富山（→北信越ブロック）、松山（→四国ブロック）で地域 PT 合宿を開いてきた。また、全国レベルでのコーディネーターミーティングを開始している（61 ページ参照）。

地域での ESD 展開を検討されている方は、地域ネットワークプロジェクトチーム（地域 PT）に気軽に相談いただきたい。

そのうえで、以下にこれまで開催してきた地域の担い手、さらなる発展のための課題を提起したい。

■持続可能な地域づくりに必要なもの、3 つ

それは第一に、市民の力、市民のイニシアチブである。

地域の課題、社会の課題を自ら解決しようとする市民の力をつくらなければ、なにもはじまらない（ESD= 市民教育、コミュニティ・エンパワメント）。

第二に、その力によって築きあげる希望のトライアングル（市民・企業・行政のパートナーシップ）である。これは、市町村のレベルだけでなくコミュニティのレベルでこそ築かれる必要がある。

そのためには第三に、「異なる立場の人を対等にして出会わせつなぎ、社会のビジョンに沿って調整していく人」、つまりコーディネーターが必要である。

今みなさんの地域で取り組まれている ESD はこれらの課題にどれほど迫れているだろうか。

■ネットワークはなにをめざすか

なかよしネットワークは長続きしない。お互いの足りないところをサポートし合い、お互いのめざすべきものを議論し合うネットワークでなければ発展はない。

地域ミーティングで形成されつつあるさまざまな地域ネットワークは、次のように分類・整理できるだろう。

- 1 既存の NGO・NPO のネットワーク
- 2 公民館や学校を連携させた学社融合教育のネットワーク
- 3 自治体と市民の協働をベースとしたネットワーク
- 4 大学・研究機関を核としたネットワーク

1 が最も多いパターンだと思われる。どこからスタートしてもよいのだが、そのネットワークからなにを生みだしていくのか、なにをめざしていくのかが常に意識されている必要がある。

そのためには、ESD の 10 年間でその地域ではなにを目標としていくのか、またその目標を達成するための実現方策はなにかを議論することが求められている。

■“地域発 ESD” 飛躍のとき

「このままのやり方では続けることができない」という問題を感じている人はたくさんいる。同時に、「こうすれば続けていくことができる」というアイデアをもっている人もたくさんいる。

それを引き出し、“わたし発” の ESD の動きを“地域発”

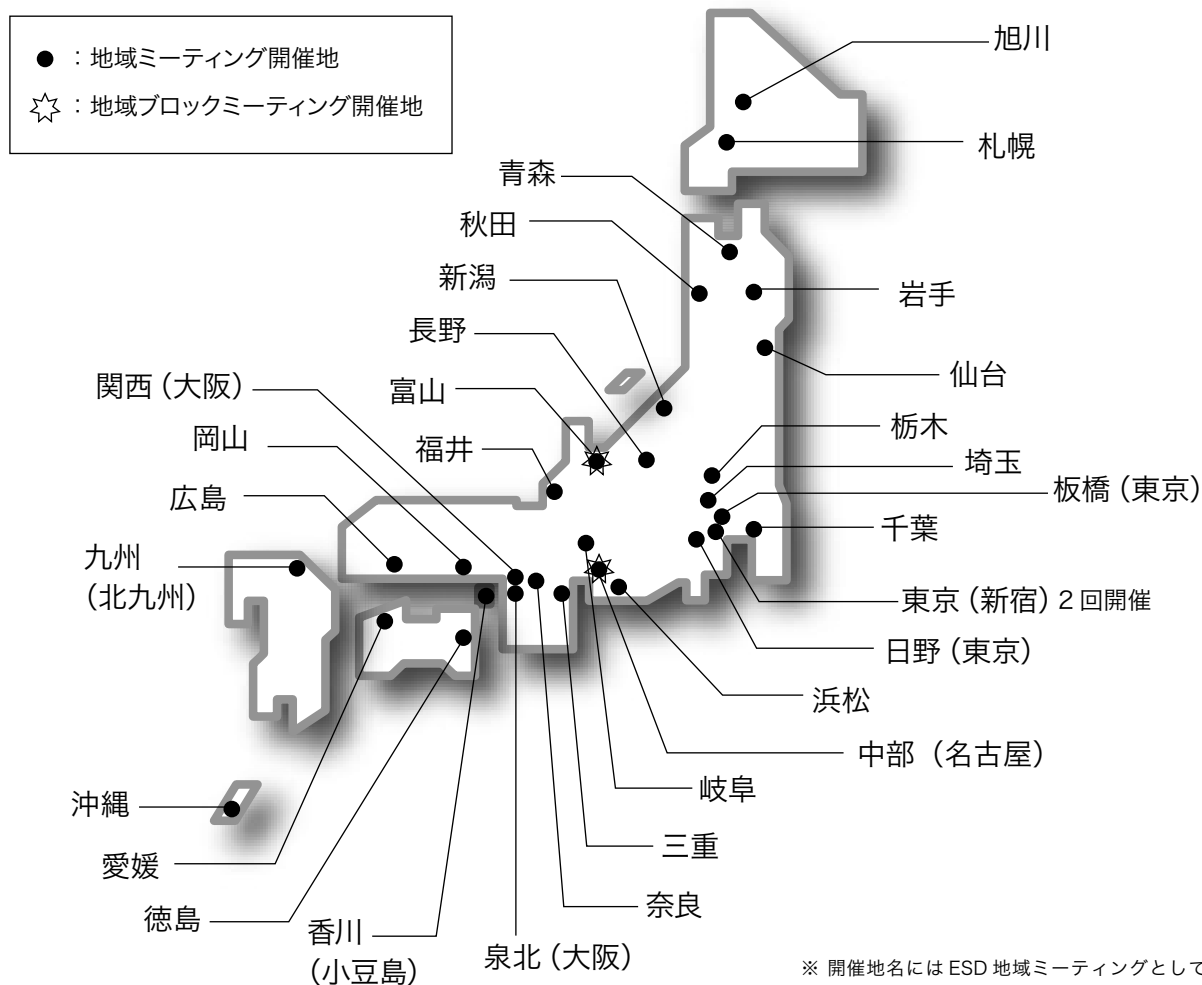
のESDのうねりにしていく必要がある。

そのためには、わたしの思いや気づきを引き出していく場づくり、人づくりが必要だ。そこで出てきた問題や課題を、調査・分析して問題解決のプロジェクトを生み出していくプロセスが必要だ。そして、そのプロジェクトが

持続可能な地域づくりに発展していくために、他のNPOや行政、企業、大学、研究機関とのコーディネートが必要だ。

それらをつくりだしていくためにはなにをすべきか。“地域発ESD”の飛躍のときがきている。

地域ミーティング・地域ブロックミーティング開催地



※ 開催地名にはESD地域ミーティングとして登録されている地名を記したが、()内に都道府県または区市町村を補足した。

地域ブロックミーティング開催リスト

開催地	日程	開催会場	呼びかけ文	開催団体名
北信越	2005年 12月23日	富山県総合福祉会館(サンシップとやま)大ホール 601~604研修室	2005年から日本の提唱により「国連・持続可能な開発のための教育の10年」がはじまりました。今、『未来を作る教育』をかたちづくる時。行政も、NPOも、まちも、わたしも、学校も、政治も、家庭もESD 手をつなごう! 風をおこそう!	環境省、北信越ブロックミーティング実行委員会、NPOエコテクノロジー研究会
東海	2005年 12月18日	新東通信(株)会議室	ESD-Tキックオフミーティング もっと知りたい! もっと未来へ! 国連・持続可能な開発のための教育(ESD)の10年がはじまりました。今私にできることを見つけよう。持続可能な社会を作る教育のしくみを探るつどい	環境省、エコプラットフォーム東海、中部環境パートナーシップオフィス

地域ミーティング開催リスト

2002-03 年度

開催地	日程	参加数	開催会場	サブテーマ、呼びかけ文など	地域の担当団体
仙台	3月7日	45	ハーネル仙台	「持続可能な開発のための教育の10年」ネットワークミーティング	NPO 環境保全米ネットワーク
岡山	3月15日	38	岡山国際交流センター国際会議場	同上	岡山ユネスコ協会
札幌	3月17日	28	環境サポートセンター	同上	NPO 当別エコロジカルコミュニティ
九州	3月22日	39	北九州市国際村交流センター国際会議室	同上	(財)北九州国際技術協力協会
東京	3月30日	53	新宿区立大久保中学校図書室	ツナガルイミフカンガエヨウ「持続可能な開発のための教育の10年」ネットワークミーティング	(社)日本環境教育フォーラム
中部	4月12日	61	新東通信(株)	「持続可能な開発のための教育の10年」ネットワークミーティング	NPO 中部リサイクル運動市民の会
浜松	6月7日	38	浜松市福祉交流センター	記載なし	NPO サンクチュアリネイチャーセンター
愛媛	6月16日	56	松山市総合福祉センター5F中会議室	記載なし	えひめグローバルネットワーク
岐阜	11月16日	33	岐阜大学全学共通棟105号室	記載なし	NPO 地球の未来
広島	1月17日	28	広島県立総合体育館大会議室	記載なし	ESD-J 広島
沖縄	1月17・18日	24	那覇市立森の家みんな	「持続可能な開発のための教育の10年」をひも解き、つなぐ	NPO エコ・ビジョン沖縄
新潟	2004年1月31日 2月1日	57	点塾	ESD で地域が見える・私が見える・地球が見える	ESD 地域ネットワークにいがた
関西	2月3日	39	大阪NPOプラザ	ーなんやねん ESD ? どうするねん ESD ! ?	NPO 関西 NGO 協議会
富山	2月8日	33	富山県総合福祉会館サンシップとやま	どこから始める? 誰から始める? 何から始める ESD	NPO エコテクノロジー研究会
奈良	2月11日	11	奈良県解放センター	記載なし	NPO ほっとねっと

2004 年度

開催地	日程	参加数	開催会場	テーマ	開催団体名
福井	11月20日	14	福井県国際交流会館	記載なし	コラボ NPO ふくい
埼玉	12月11日	50	東松山市市民文化センター	持続可能な社会を協働で築こう!	「環境まちづくりフォーラム・埼玉」実行委員会
長野	12月14日	34	信州大学教育学部しなのき会館	ESD と地球温暖化防止県民計画(長野モデル)	長野県環境教育研究会
千葉	12月18日	30	蘇我勤労市民会館	～地域のみなさんとともに、いろいろな「教育」について考えてみませんか～	ESD ちばミーティング実行委員会
栃木	2005年 2月11日	18	宇都宮大学教育学部3階2301教室	記載なし	宇都宮大学循環型社会形成共同研究チーム
三重	2月13日	43	みえ市民活動ボランティアセンター	E: ええやん S: すこいやん D: できるやん つなげよに三重の輪!	ESD in 三重
東京(23区)	2月20日	13	新宿環境学習情報センター	誇れる東京をめざす地域ネットワーク交流会実行委員会活動計画	NPO 新宿環境活動ネット(実行委員会)

2005 年度

開催地	日程	参加数	開催会場	テーマ	開催団体名
徳島	6月4日	80	徳島大学総合科学部3号館1階(常三島キャンパス)	地球が“せこい”!? いま地域から国際協力を～持続可能で公平な世界をつくるため四国からできること～	四国 NGO ネットワーク(SNN)
板橋	9月3日	23	いたばしボランティア・NPO ホール	2005 ESD 地域ネットワークミーティング in いたばし	NPO ボランティア市民活動学習推進センターいたばし
岩手	10月20日 21日	39 25	岩手大学	持続可能な地域社会の実現をめざして	環境パートナーシップいわて岩手大学
泉北(大阪)	2006年 2月12日	80	泉北環境整備施設組合 泉北クリーンセンター	「ESD 泉北」地域ミーティング	NPO ダッシュ
旭川	2月11日	10	旭川市文化会館	持続可能な社会をめざす旭川と北海道	旭川地域ミーティング実行委員会
青森	2月18日	15	八戸商工会議所	持続可能な地域と地球へ つながり、学びと参画のプロセスをつくりだそう	あおり開発教育研究会
香川	2月19日	30	土庄町中央公民館3階 講座室	みんなで考えよう、手をつないで未来をつくろう	NPO いきいき小豆島
秋田	2月24日	13	南部市民活動サポートセンター	つながろう、住みつづけられる地域と地球のために!	特定非営利活動法人秋田県南NPOセンター
日野	2月26日	40	日野市多摩平の森 ふれあい館	持続可能なまちづくりを考える～市民参画による総合計画の実現に向けて～	日野市地域ミーティング実行委員会

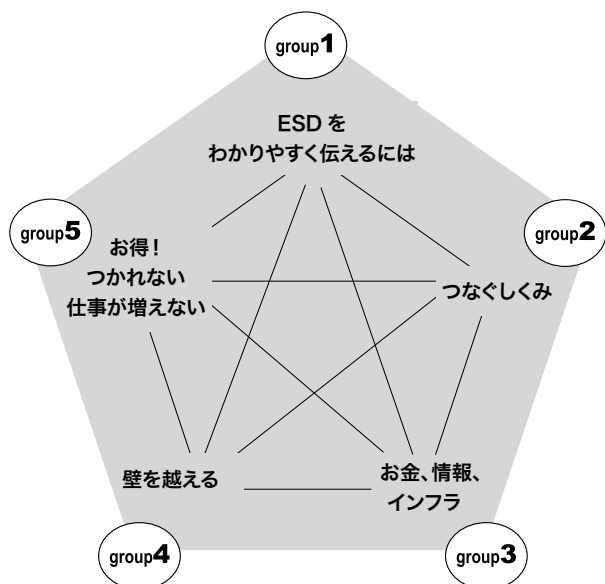
私にとってのESDをイメージし、言葉にしていこう

全国コーディネーターミーティングの成果

2006年2月4日。翌日の第3回全国ミーティングに先立ち、全国コーディネーターミーティングが開かれた（東京・市ヶ谷）。出席者は、2003年度、2004年度、2005年度の地域ミーティングの主催者とこれから地域ミーティングを開きたいと考えている地域の代表40名。

まず、地域PTリーダーの森良が地域ネットワークづくりの意義と課題について話をした（58ページ参照）。つぎに、地域でのESD展開のさまざまな事例として、北海道旭川市（松田剛さん）、東京都日野市（青木襄児さん）、岩手県（梶原昌五さん）、岡山県岡山市（原朋子さん）、そして、北信越ブロック地域（伊藤通子さん）からの発表を伺う。そのうえで、参加者全員で「ESDを地域に広げるための課題」を明確にするためのワークショップを行った。

課題は下図のような5点に収約されたので、参加者に取り組みたい課題を選択してもらい、5つのグループに分かれて、各課題の解決策について話し合ってもらった。



その結果を各グループの代表にまとめてもらったので、紹介する。要約すれば、持続可能な社会やESDについて、自前のイメージ・言葉をもって、さまざまな主体をつないでいく。それぞれのメリットを明確にするとともに共通の目標をもって、個人も組織も成長し前進できる、長期的・戦略的なプロセスづくりが必要だということである（森良）。

Group 1

ESDをわかりやすく伝えるには？

報告：佐野淳也さん

このグループではいかにして地域でESDをわかりやすく伝え、広げていけばよいのか、その方法や心構えについて話し合った。

ESDを広げるうえでは、行政による組織的な動きと、草の根市民による自発的なもの、というトップダウンとボトムアップをうまくつなげることが大切だとの意見がでた。また「“ESD”といろいろな場で言い続けることにより、PTAやNPOなどのようにだんだんと根づいていくのでは？」との意見もでた。一度話を聞いてその場ではわかったつもりになっても、家に帰ると忘れてしまったりすることから、ESDについて繰り返し触れて話し合う場をたくさん地域につくることの重要さも話し合われた。

さらには「福祉とESD」「サッカーとESD」のように、〇〇とESDという形で対象別にすでに人びとが興味をもっているテーマとESDとの関連を考えるパンフレットや講座を開発していくことも重要であると指摘された。

最終的には、地域や活動主体ごとに自前の「持続可能な社会」のイメージやESDの説明方法を持ち、自分たちの言葉で地域に伝えていくことが大切との認識を深めた。



Group2

つなぐしくみ

報告：長岡素彦さん

ESD を、「子ども発→子ども行き」で行うことが大切ではないだろうか？ 子どもたちの興味や関心から発して（子ども発）、子ども自身の活動や子育てに関する活動をととして ESD を行うことで、将来を担う子どもたちが存分に活躍できる「持続可能な社会」に至る（子ども行き）というシナリオだ。

つまり、ふつうの人たちにとって目新しい概念である「持続可能な開発のための教育」として行うのではなく、子ども会や学校、公民館、といった既存の「実践の場」で、これまで出会わなかったような人たちと「仲間づくり」をしながら活動し、気づいてみれば ESD だった、というしくみをつくることだ。

「仲間づくり」には、子どもにかかわる「地域のマップづくり」や「連続講座」を行うことが有効だろう。また、「実践の場」としては、人間生活にかかわる、あらゆる場所が挙げられるが、とくに重要な場として、「学校」と「地域」を位置づけたい。ESD はあらゆる教科に関連するし、「総合的な学習の時間」は ESD そのものだ。また、職場（あるいは学校）と家庭のほかにも、もう一つの自分の居場所を「地域」につくることも、ESD につながる日常活動だ。その二つの場を中心に「子ども発→子ども行き」の ESD を効果的に展開したい。

Group3

お金・情報・インフラ

報告：辻英之さん

このグループでは、「経済」「お金」と ESD についてディスカッションした。ややもすると「いかに補助金や助成金を獲得するか」というテクニック論に陥りがちだが、そのディスカッションを重ねているだけでは ESD の発展・普及はないだろうという認識で一致した。

企業が CSR として ESD に取り組み、そのような企業に政府が補助金をだす。また、そのような企業の商品や政府の政策を国民が支持していくように、ESD-J も普及啓発を図る、というような、国民的な運動にしていくことが必要ではないかと話し合われた。そのさい、WIN-WIN-WIN の状況、すなわち、国民も、企業も、政府も、ESD-J もメリットがあるようなしくみをつくるとよいだろうということだった。

しかし、いずれにしても、「ESD」そのものの認知度を上げる努力をしなければ、しくみはつくれないだろう。ESD-J も含めて、あらゆる主体が ESD の普及に努めなければ、持続可能な社会構築は実現しないだろうということだった。

Group4

壁を越える

報告：梶原昌五さん

ESD の展開がすすまない理由の一つに、「壁」の存在がある。「壁」とは組織間の壁であり、取組みや研究分野間の壁である。また、現状維持という組織



内の壁でもある。そこで「壁を越える」ためにグループで考えた結果、「ベルリンの壁に学ぶ」ことが目標として挙げられた。つまり、いつの時代にも壁はあるが、時代・社会・市民は常に進化しており、そのエネルギーの「ワナワナ」がいつか必ず壁を壊すのである。

問題は、その「ワナワナ」の力をどう蓄え、どう使うか、ということである。私たちが社会の動きに敏感になり、新しい状況に適應することで「ワナワナ」は蓄えられる。危機にある現状を組織のトップに説明し、壁が壊れたあとの組織の運営にお得感を抱かせ、説得力のある具体的なイメージを示すことで、壁が壊れたあとの世界をコントロールすることが可能である。日本の組織は外圧に弱いので、他の組織の成功例を示すことにより、トップを説得し、活用することができるであろう。

Group 5

お得！ つかれない、仕事がふえない
……楽しいしかけ

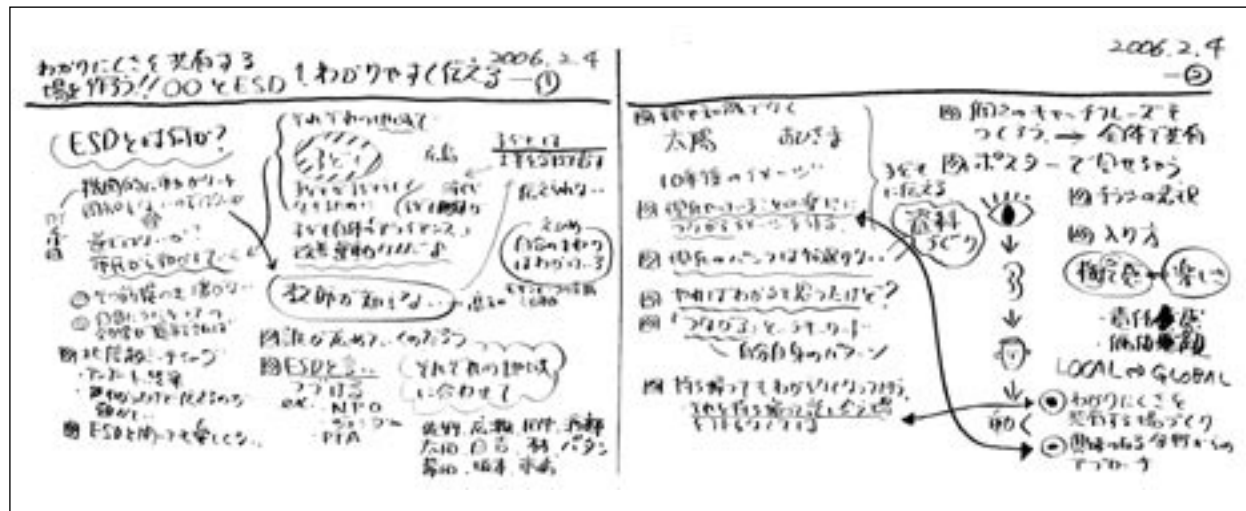
作成：榎井縁さん

「ESD はお得」チームは、戦争が減るなどの地球規模のものから、幸福感など個人の感情にいたるまで、さまざまな段階の「得」があることを踏まえたうえで、地域の活性化や社会的メリットに焦点をあてて「地域発 ESD お得感倍増アイデア」を作成した。アイデアは「すぐできる」から「長期的作戦が必要」まで、また「個人で」から「社会で」取り組むまでの座標軸をつくって整理した。

すぐにできることとして、個人レベルでは「ESD-Jに入る」をはじめ、ESD の実践と普及や情報提供、組織レベルでは、ESD ツアー、テーマソング、助成金、機能集約による経費節減などが挙げられた。

長期的戦略になるほど、個人よりも社会にアイデアが集中し、CSR による企業イメージのアップや、ドキュメンタリー番組の制作、ESD 人材バンク、ESD 通貨、教育戦略を含んだ専門的な人やしくみづくり、税制上の優遇措置などが挙げられた。具体的に地域で「お得作戦」を展開している話も聞けて、たいへん刺激的なワークショップだった。

グループ1 ESDをわかりやすく伝えるには？



ESD 地域ミーティング in 旭川

開催日：2006 年 2 月 11 日 (土) 9:30 ~ 16:00

場 所：旭川市民文化会館 (北海道旭川市七条通 9-50)

持続可能な社会をめざす旭川と北海道

主 催：ESD 地域ミーティング旭川実行委員会

※第 1 部「まなびピア 2006」の主催は旭川市教育委員会生涯学習課

共 催：旭川市国際交流委員会、JICA 札幌、北海道開発教育ネットワーク、
地域と地球の「市民」Net Work"○" (サークル)、ESD-J

協 力：当別エコロジカルコミュニティ、上川管内国際理解教育研究協議会、環境地図教育研究会、
ピースウォーカー旭川

連絡先：松田剛史 TEL：0166-53-2751 E-mail：mattakeyan@juno.ocn.ne.jp

参加者：【第 1 部】旭川市生涯学習フェア「まなびピア 2006」 屋台村関係者 60 名、一般参加者 11 名
一般の方は 7 割年配の方、2 割青年、残りの 1 割が子どもだった。関係者は、地元教育大
の学生や教授、市民グループ・NPO 関係者と、さまざまな年代、性別の方がそれぞれに特
徴的なアピールをされていた。

【第 2 部】「持続可能な開発のための教育 (ESD)」旭川ミーティング 10 名

屋台村に出店していただいた方々を中心に。

プログラム： 8:45 ~ 実行委員打合せと会場の準備。

9:25 ~ 開場

9:30 ~ 第 1 部「遊び体験地球市民村」開始

11:30 ~ フィナーレ (音楽や歌、踊りを参加者とともにやる)

12:00 第 1 部終了 それぞれ片付け、会場撤収。午後は別会場に移動。

13:30 ~ 第 2 部開始 「持続可能な社会を目指して～旭川/北海道～」ESD 地域ミーティング

16:00 第 2 部終了 解散 片付け

■内容紹介

今回の旭川での地域ミーティングは、旭川市で「持続可能な社会」をキーワードに市民活動を実践している団体に声を掛けて実現した。そのなかでも、ミーティングを行うというだけでなく、ミーティングに参加していただいたそれぞれの団体が、市民に対して日ごろの活動を発表する場として、旭川市生涯学習フェア「まなびピア 2006」の一環として行ったことはよいアイデアだった。参加・発表団体は開発教育や国際理解教育関係がほとんどで、これからの展開のなかで「持続可能な社会」をコンセプトとしつつ他分野で活動している団体や個人を巻き込んでいければと思われる。

第 1 部 (午前) は「遊び体験 地球市民村」とのタイトルで、国際理解・国際協力・環境・平和・人権・福祉などの 19 団体がそれぞれ 1 ブースを割り振りし、写真パネル展示、アクティビティー体験、お話、音楽などそれぞれ特徴ある活動発表を行い、とてもよい雰囲気でも盛りあがっていた。

当日はあいにくの吹雪となり、一般参加者は11名（子ども1名）と少なかったが、それぞれブースをだしている関係者だけで60名にもなり、お互いに自己紹介やそれぞれの団体の交流、情報交換をしたりしながら、参加者同士のネットワークのきっかけになった。最後には、海外の踊り、歌、アイヌの歌を演奏。このときは会場に集まったメンバー同士の一体感が生まれ、おおいに盛りあがるなかで、午前の部が終了した。



第2部（午後）は、「ESDの意義と今後の旭川でのアクションの可能性を探っていく」という目的で、旭川で活発に活動している団体の代表者10名とミーティングを行った。それぞれの団体同士、このような場で話をする機会が今までになかったもので、アイスブレイキングのゲームを中心に、それぞれ顔を覚えたり、活動を知ることからスタートした。

その後、グループに分かれてディスカッションを行った。はじめに、自分に今できることを挙げ、それをグループごとにまとめ、これから旭川で自分たちがどんなことを行っていくのか？ どのような教育をつくっていけば、この旭川が持続可能な社会になっていくのかについて話し合い、発表した。

各グループのまとめは、以下のとおり。

- 1) 幅広い年代の方が楽しめるハイキング的な催しものを企画し行っていっていったらどうか
- 2) 自分の住んでいるところを知ることからはじめ、同じような活動を行っている団体、個人との情報を共有し、その活動をさまざまな市民の方に知ってもらおう。そして、どのようにしたらよいのかを話し合う。この繰り返しを行うことで少しずつ変化していくのではないだろうか？
- 3) 行政を含めた関連施設の連携が重要。向かっている方向は行政も民間もほとんど同じなのだから、みんながうまく連携していけばもっと大きな力が生まれるのではないだろうか？

■今後に向けて

このグループワークをとおして、お互いの考えていることや行っていることが共有できたのではないだろうか。まずは、お互いがそれぞれのことを知り合うことというスタートラインに立ったように思われる。今後の展開としては、地元のコーディネーターの活動に負うところが大きいですが、ESD-Jがサポートをしながら、より広がりのある輪をつくっていくことができればと思われる。

報告：中林晃（NPO 法人 当別エコロジカルコミュニティ）

ESD 地域ミーティング in 青森

開催日：2006 年 2 月 18 日（土） 13:00 ～ 16:00

場 所：八戸商工会議所（青森県八戸市堀端町 2-3）

持続可能な地域と地球へ つながり、学びと参画のプロセスをつくりだそう

主 催：「ESD あおもり」実行委員会、あおもり開発教育研究会、ESD-J

連絡先：あおもり開発教育研究会 担当：川村宏義

TEL：0178-52-3831 E-mail：tjfgn546@ybb.ne.jp

参加者：15 名

一般市民、教員、市議会議員、衆議院議員、環境教育関係者、大学教授ほか

プログラム： 1. ESD について
2. 地域の事例
3. ネットワークづくりに向けて

■内容紹介

参加者の都合に合わせるため、午前の部（11:00 ～ 12:00）と午後の部（13:00 ～ 16:00）の二段構えとした。午前中は地元選出の衆議院議員の方と、長い間ネパールの支援を行ってきたロータリークラブの会長が参加した。2 人とも ESD についてはあまり知らなかった。しかし今回のミーティングによって、ESD が重要なことであるという認識をもていただくことができた。衆議院議員の方にも一市民として今後も参加してもらえるかを尋ねたところ、快諾してくれた。

午後の部は市議会議員の方をはじめとして小学校の先生、環境教育関係者、中学校の先生、JICA 国際協力推進員、協力隊 OB など 12 名が参加した。はじめに自己紹介を行った。それぞれの名前と自分の所属、そして日ごろどんな活動をしているか話していただいた。2 巡めには ESD に関して活動していること、あるいは最初に話した活動について詳しく説明していただいた。

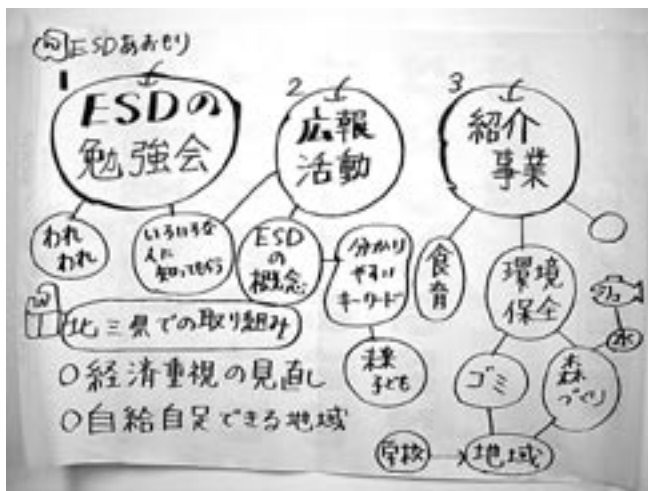
たとえば、地元のある海や川の汚染について調べている人がいた。その方は川の調査地点よりも下流の部分で汚水が流れ込んでいることにより、河口近くの海水浴場が汚染され、遊泳禁止になっていることを話してくださった。この解決のために参加者に協力を求めた。

多くの人は ESD についてあまり詳しく理解していなかったようで、事務局から参加した村上さんの説明に対して多くの質問が出された。村上さんの説明のなかには、小泉首相が提唱したということや、先進国では日本の取り組みがやや遅れ気味なこと、各地域のひとびとが主体となって地域独自の ESD をつくっていくことが大切であると言われていることなどが説明された。

その後、参加者が 3 つのテーブルに分かれ、これからなにをしていったらいいかについて話し合った。

1 つめのグループでは、3 つのことが挙げられた。

1. ESD の勉強会：この勉強会はここに参加した私たち自身の勉強会と他の人たちに知ってもらうための勉強会が考えられている。
2. 広報活動：この広報活動のなかには、もちろんいろいろな人に知ってもらうための勉強会も含まれる。さらに ESD の概念についてわかりやすいキーワードをもとに、未来とか子どもをといったことについて説明することを挙げている。
3. 事業の紹介：食育や環境保全にかかわる事業を紹介するなかで、地域や学校を含めた私たち自身と自然や環境とのつながりについて考え学ぶということが含まれる。



2 つめのグループでは現在やっていることを挙げていた。

1. ユネスコの識字教育や環境教育のビデオ教材の紹介。
2. パレスチナの教材をつくる。パレスチナの問題をとおして考える。
3. JICA の青年招聘事業をとおして地域について考える。
4. 以上のような現在行っていることに、ESD 的な味つけをして異分野の人との情報交換の場をつくる。

3 つめのグループでは「ESD どうしたい」というテーマで話し合った。

1. 教員対象の教材開発や研修は人を呼び込む。わかりやすい活動をアピールしていく。
2. 参加型の方式や手法を大切にする。
3. 異文化性が生み出す力や魅力が命である。
4. ローカル的には青森という地域よりもさらに小さい地域を考え行動する。それらは全体よりも個人個人のつながりを大切にする。

参加者の 1 人は、すでに事業計画を考えだしていた。

■今後に向けて

いずれにしても今回で終わりとせず、それぞれが連絡できるようにメールを交換し、今日参加した人全員が共有する、そして 4 月にもう一度集まって先のことを考えることが確認された。

報告：川村宏義（あおもり開発教育研究会）

ESD 地域ミーティング in 岩手

開催日：2005 年 10 月 20 日（木）、21 日（金）

場 所：岩手大学（岩手県盛岡市上田 3-18-8）

持続可能な地域社会の実現をめざして

主 催：NPO 法人 環境パートナーシップいわて、国立大学法人 岩手大学、ESD-J

連絡先：NPO 法人 環境パートナーシップいわて URL:<http://eco.soc.or.jp/>

梶原昌五 FAX:019-621-6556 e-mail:skaji@iwate-u.ac.jp8

参加者：第 1 部 39 名

県内環境団体、岩手県国際交流協会、子育て支援団体、福祉団体、小中高教諭、高専教員、児童館職員、新聞記者、岩手県職員、岩手大学教職員・学生、環境パートナーシップいわて会員など

第 2 部 25 名

高校教員、岩手大学教職員・学長・理事・監事・学生

プログラム：第 1 部『地域における ESD と市民参加』 10 月 20 日 18:00～20:30

話題提供：村上千里（ESD-J 事務局長）/ 森 良（ESD-J 理事）/ 池田満之（ESD-J 理事）

第 2 部『大学における ESD と地域貢献』 10 月 21 日 9:30～12:00

話題提供：池田満之（ESD-J 理事）/ 玉 真之介（岩手大学副学長）

■ 内容紹介

「ESD 地域ミーティング in 岩手」は、NPO 法人環境パートナーシップいわて（以下環ぱい）のメインプロジェクトである「岩手県環境基本方針市民提案プロジェクト」の勉強会として計画された。しかし、これを企画した時期に、岩手大学が、2005 年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）」（環境教育に役立つ知的財産教育）に採択され、その計画のなかで ESD-J の理事による講演会を開催する予定があるとの情報を得たので、それならば、課題を共有する 3 者の共催が妥当であるとの結論に至り、それぞれが、大学との共催、NPO との共催ははじめてという画期的な形での開催となった。

● 10 月 20 日 第 1 部「地域における ESD と市民参加」

20 日の第 1 部は、おもに地域の団体・個人を対象に開催された。枝松環ぱい理事が上記経緯を説明し、市民提案プロジェクト実行委員長の梶原（岩手大学教員 / 環ぱい副代表）のあいさつのあと、参加者全員の自己紹介に移った。

自己紹介では、各自の活動内容および参加動機についてじっくりと話していただき、どんな方がどんな思いで参加しているかを共有した。基本的にはこれがネライであり、案内状発送も、できるだけ異分野の方々にお集りいただけるよう配慮した。

次に、村上氏より、ESD についての簡単な説明をいただき、池田氏の学校との連携についての活動を拝見した。最後に森氏から総括をいただき、もう文科省の言う教育を行う時代ではなく、地域の人がコーディネーターになっ

て教育をすすめるべきであるとの共通認識が示された。そのさい、「目標をもつ」「目標を達成するための方策・しくみをつくる」「岩手シミュレーションをつくる」ことが大切との助言をいただいた。

講演後、参加者の声をいただいた。小学校の先生からは、自分がコーディネーターになろうとして疲れた。これからは地域の人が教育のコーディネーターになるべきである、との意見をいただいた。また、高校の先生からは、それぞれの活動のつながりがみえないために、貧困の原因がわれわれ日本人にあることもみえない。これでは、なにを教育しているのかわからない。との意見があった。



最後に、玉副学長から、ESD は人びとのつながりができてくることであり、岩手大学は、教育のなかに地域の課題を入れていきたいとの宣言と、翌日の案内があった。

● 10月21日 第2部「大学におけるESDと地域貢献」

翌21日の第2部は、おもに大学教員を対象に行われた。平山健一岩手大学長のあいさつのあと、玉副学長より岩手大学のESDへの取組みが紹介され、池田氏による事例紹介をいただいた。意見交換では、学校との協働の方法が池田氏から詳細に紹介され、それを受けて学校現場からの声を高校教員よりいただいた。また、岩手大学におけるESDは、地方の問題を発見し、それを解決するために世界に視野を広げるものであってほしいとの意見や、すでに行っている学校の支援による人材の養成を継続してほしいという意見があった。

なお、全記録をDVDで提供することができるので、ご希望の方は梶原までご連絡いただきたい。ただし、勤務の合間につくるので、時間がかかることはご了承ください。

■ 今後に向けて

岩手大学は、ESD-Jの団体会員となった。ESDを大学教育の旗印とすべく、すべての構成員を対象とするESD研究会を平成17年度中に発足させ、次年度の活動計画を策定した。

地域では、研究会発足に向けて、環パいの会員を中心に小さいグループ、学生のグループを中心に声をかけている。これは、大きなグループはいずれ加入せざるを得ないときがくるだろうとの認識による。さらに、青森・秋田・岩手の北東北3県での地域連携をめざして草の根的な交流がすすんでおり、平成18年度中に形にする予定である。

報告：梶原昌五（NPO法人環境パートナーシップいわて / 国立大学法人岩手大学）

ESD 地域ミーティング in 秋田

開催日：2006 年 2 月 24 日（金） 10:00 ～ 16:00

場 所：南部市民活動サポートセンター（秋田県横手市神明町 1-9）

つながろう、住みつづけられる地域と地球のために！

主 催：NPO 法人 秋田県南 NPO センター

協 力：ESD-J

連絡先：NPO 法人 秋田県南 NPO センター 担当：パタン亜紀子

〒013-0046 秋田県横手市神明町 1-9 TEL：0182-33-7002 FAX：0182-33-7038

E-mail：ssc7002@luck.ocn.ne.jp

参加者：13 名（30 代から 90 代まで NPO 関係者、一般社会人など）

プログラム： 1. 自己紹介

参加者同士、自分たちの活動や参加の動機を共有する。

2. パネルディスカッション

～パレスチナオリーブ油と秋田市民風車から学ぶ～

宮城と秋田で活動する各分野の NPO に事例発表をしていただき、それを受けてコーディネーターの森良さんが質問を投げかける。また参加者からの質疑応答も行う。

3. ワークショップ

それぞれがやっていることをだし合い、つなぎ合って、住みつづけられる地域と地球をつくるためにはなにをするかを話し合う。

■内容紹介

●自己紹介（進行：パタン）

アイスブレイクを兼ねて、参加者とパネリスト、コーディネーターの関係性（対等に学び合う）を共通認識するためにいった。

●パネルディスカッション（進行：森良さん）

▼ ESD について：この地域で自分たちが持続可能な社会をどうやってつくっていくのか？ 住み続けられる地域のキーポイントとして、①エネルギー、②食料、③ケア、それを世界の人たちとどうつながれるのか？ 自分たちが住み続けられる地域、地球であるために。

▼ パレスチナ・オリーブ（皆川さん）：生産者との出会いに共感、フェアトレードでお互いに経済的に自立する。オリーブ農家と女性の支援、収入を得ることによって女性の力づけになっていく。問題解決のため社会を変えていこうという意識。しかし現実問題として、イスラエルの社会が変わらなければ変わらない。

▼ 市民風車の会あきた（原田さん）：風車は CO₂ を出さない。1 基で 1000 世帯の電気をつくる。地域の人たちが自分たちの電気だと思う意識改革に。基金（ファンド）への投資は地域経済の振興につながる。

参加者からの質問：

- ① Q: パレスチナの現状について A: パレスチナの歴史、体験談など。
- ② Q: 風車の落雷問題について
A: 自然災害の対応策として保険に加入。
- ③ Q: 組織運営について
A: NPO だけではできないことを企業と協力する。コミュニティービジネス、地域通貨、報酬の考え方。



●ワークショップ

＜持続不能なことを持続可能にするには？＞

- ① 今までのやり方では続けることができないこと。
自分が感じている問題点を書き、発表。3 グループに分かれて話し合い。
- ② ①をどうしたら続けることができるか。
自分が考える“できること”を書き、発表。3 グループに分かれて話し合い。
- ③ ①から②になるためには、なにをしたらいいか。
具体的にどう行動するかを書き、発表。3 グループに分かれて話し合い。

＜わたしのESDを考える＞

- ・ シンプルライフ（省エネルギー生活のススメ）：食育教育、自力生活、エネルギー、流通制度、しつけや気づきを促す
- ・ みんな先生プロジェクト：地域に学校をつくる。子どもが持ち回りで先生になる。自分・地元で自信をもつ。ちがいを受け入れる。
- ・ 人とまちの Very good な関係：NPO が事業収入を確保しながら他の NPO、行政、企業、住民を巻き込み、人とまちをつないでいく。

＜自分発 地域経由 秋田着＞

- ① 子どもや市民が主役〔自治、協働、学習〕
- ② 市民が世界的につながる

■今後に向けて

参加者のアンケートによると、ESD はたいへん身近なこと。地域問題 = 世界の問題とつながっていること。といった気づきや、地域で活動するうえでの問題点が似ている、問題の解決方法がみえてきた、活動を支え合う関係が生まれそうだ。といった感想が多かった。人がつながって問題を話し合うことで、より多くの解決策を自分たちで獲得できるということを参加者が実感できたように思う。これからは参加したメンバーを中心にESDをたくさん発信できるよう、学習会を重ねていきたい。

報告：パタン亜紀子（NPO 法人 秋田県南 NPO センター）

ESD 地域ミーティング in 板橋

開催日：2005 年 9 月 3 日（土） 18:00 ～ 21:00

場 所：いたばしボランティア・NPO ホール（東京都板橋区本町 24-1）

2005 ESD 地域ネットワークミーティング in いたばし

主 催：NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし

協 力：ESD-J

連絡先：NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし 担当：加藤勉

TEL&FAX：03-5943-1888

URL <http://homepage3.nifty.com/gakusyu-itabashi/>

E-mail：gakusyu-itabashi@nifty.com

参加者：23 名（NPO 団体関係者）

スケジュール：あいさつ

1. いたばしにおける学習の取組み
2. さまざまな地域の活動から 環境共育ネットワーク「ワンダースクエア」市嶋彰
人権教育 NPO 法人 ダッシュ 廣瀬聡夫
3. 質疑応答
4. まとめ NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター 森良
5. 交流会

■内容紹介

●いたばしにおける学習の取組み

— 21 世紀の 100 年をいかに“希望”のもてる世紀にすることができるか—

私たちの活動主体である“ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし”は、平成 13（2001）年 4 月に発足した。発足当時の中心的な活動としては、2 つの事業に大別することができるであろう。一つは、大原社会教育会館との共催による「ボランティア・市民活動フォーラム」を軸とする「大人の学びのサポート」事業であり、一つは、区内の小中学校との協働として実施された「総合的な学習の時間」のサポートを軸とする「子どもの学びのサポート」事業である。これらの事業は、市（区）民主体の「相互学習」を基盤とした内容になっている。

（1）ESD といたばしの学習の取組み

「21 世紀の“希望”」につながる取組みを持続していくには、一方で「地球市民」という意識から地域の問題を捉え、それを課題として取り組むという姿勢が必要となる。ESD との連携は、まさにここにある。

いたばしでは、2003 年度から、これまでの活動に ESD の視点を含めた新たな事業として「火曜フォーラム」、「日曜ボランティア広場」をはじめた。ここでは「持続可能な未来のための教育の 10 年」に向けて、「持続可能な未来」のために私たちはなにができるかなどを考える貴重な機会となった。

2004 年度には、前年度に行われた学びの積重ねが、一人ひとりの具体的な実践につながっていった。たとえば「総合的な学習の時間」のサポート事業では、区内の高等学校へとかかわりを広げ、「高校生と地域の学び」

としてすすめられた。さらに2004年末に開催された「ESD キックオフミーティング」では、生徒自身によって、その学びの成果が「中間発表」として表現されたのである。ほかにも「人権プロジェクト」、「板橋がもし100人村だったら」など、市（区）民による主体的な活動は現在も継続中である。



(2) 「ともに創る未来のための学びの10年」のスタート

上記のように、いたばしでは、2003年度からESDとのかかわりを持ちながら学習の取組みを展開している。そして、この2年間にわたる「ESDについての基礎的な学習」を踏まえ、いよいよ「ESDの10年」の開始年である2005年を迎えることとなった。そこで、いたばしでは2005年のスタートにさいし、「持続可能な開発のための教育の10年」を「ともに創る未来のための学びの10年」と読みかえることで、地域における「学びのネットワーク」づくりをより意識化し、さらなる学習の取組みの展開をめざすこととした。

ESDとの取組みとしては3年目を迎える今年、「学びのネットワーク」づくりに向けて、これまでの学びの積重ねを基盤とした「ともに創る未来のための学びのネットワーク連続フォーラム」（計12回）を開催することとした。そこでこのフォーラムの開催にあたり、全12回の学びを主体的につなぐ視点を共有することで、ネットワークをしっかりと創っていこうと、「ESD 地域ネットワークミーティング in いたばし」を設定したのである。

●さまざまな地域の活動から

—学びをつなぐ視点を共有し、創造的にネットワークを構築する—

ゲストのお二人からそれぞれの地域における活動についてお話しいただいた。

環境共育ネットワーク「ワンダースクエア」の市嶋彰さんからは、幅広い活動に携わっている経験をとおして、新潟におけるESDの取組みをわかりやすくお話しいただいた。いたばしにおける日々の活動とESDとの接点をなかなか理解することが困難な私たちにとって、これからの学習の取組みへの具体的な指標となった。

人権教育NPO法人ダッシュの廣瀬聡夫さんは、「ESDと部落解放運動の連携」として、人権教育の推進における大阪・和泉市の連携の変遷についてお話しされた。自らの経験をお話しされることを通じて、自身も含め、「人権」について考える“引き出し役”となれば、とおっしゃった言葉がとても印象に残った。

■今後の取組み

いたばしには「ESDのエッセンス」に関係する団体は少なくないのだが、ESDについての理解が普及しているかといえば、否といわざるを得ない。「ESD」という名称の認知についても極めて低いのが現状である。「ESDの10年」（いたばしでは「学びの10年」）の取組みとしては、「つなぐ」「むすぶ」をキーワードに持続可能な「学びのネットワーク」の構築をはじめているところである。21世紀が“希望”のもてる世紀であるよう、私たち市（区）民が主体となって、さらに学習の取組みを推進していきたい。

報告：佐藤キミ男（NPO法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし）

ESD 地域ミーティング in 日野

2006 年 2 月 26 日 (日) 13:00 ~ 17:00

場 所：多摩平の森ふれあい館 (東京都日野市多摩平 2-9)

持続可能なまちづくりを考える ～市民参画による総合計画の実現に向けて～

主 催：日野市環境情報センター運営会議

協 力：ESD-J

連絡先：日野市環境情報センター 担当：青木襄児・杉浦忠機

TEL：042-581-1164 e-mail：kankyo@m2.hinocatv.ne.jp

参加者：40 名 (環境関係市民 20 名、ESD 全般市民 10 名、行政関係者 10 名)

プログラム： (第 1 部) 「国連・持続可能な開発のための教育の 10 年」とは
(第 2 部) 「日野いいプラン 2010 —ともに創りあげるまち—」策定中間報告
(第 3 部) 意見交換
(第 4 部) まとめ

■内容紹介

開会にあたり、馬場弘融日野市長および萱嶋信・日野市環境共生部長から、ESD 地域ミーティングを日野市で開催することについて歓迎のあいさつがあった。

ミーティングは前半で ESD の概念について ESD 関係者から解説をお願いし、後半は日野市のまちづくりに ESD の理念をどのように取り入れていくかについて話し合った。

第 1 部では、まず、関口悦子さん (ESD-J 副代表理事) から 20 分間にわたり、ESD の 10 年が自然環境だけでなく、社会環境を含めたあらゆる分野の教育を指すものであること、そして国際的取組みの行動計画として「アジェンダ 21」が国連で採択され、さらに日本が国連に ESD を提案、採択されるまでの過程が説明された。その間、日本の NGO が世界的な活動の末、日本政府に対する働きかけを行うまでの活動ぶりも披露された。

次いで、野口扶弥子さん (ESD-J 事務局) から、ESD の活動をすすめ、一人ひとりが人生を創り、社会に参画する力をもっていることを自覚するためには、全国的に地域ミーティングを拡げ、ネットワークをつくりだすことの重要性が 10 分間で述べられた。

3 番めには、ESD をいち早く市の政策に取り入れた豊中市から招聘した大源文造さん (豊中市環境政策室) から 30 分間にわたり、環境基本計画中に ESD を組み込み、「アジェンダ 21」として 88 の行動提案がなされたこと、これが契機となって、生活、環境保全、エコカレンダー、環境学習など、さまざまな部会活動がはじまったとのお話があった。また、同市では国際交流協会も ESD をきっかけに市民団体が結合し、子どもの視点からの写真ワークショップや段差のない住みよいまちづくりなどの運動がすすめられていることの紹介があり、日野市の今後の環境政策やまちづくりにたいへん参考になった。

2、3 の質問、応答の後、10 分間の休憩となった。

会議の後半（第2部）は、現在進行中の第4次日野市基本構想・基本計画「日野いいプラン2010ともに創りあげるまち」の市の担当者の一人である荻原弘次さん（市長公室）がコーディネーターとなり、この計画の検討に加わっている市民5人から分野別に、各10分間ずつ、中間報告があった。



まず、菊地修さん（健全財政を考える会）が、市の予算について、市民にとっての有効性、子孫によいふるさを残すことなどを配慮した配分をすべきであると強調した。

次いで、伊地知仁子さん（ごみ減量推進市民会議）は、マイバッグ運動をすすめるほかに、ごみを持ち込まない、ごみの発生回避の発想の大切さを述べた。

3番めの杉浦忠機さん（日野の自然を守る会）は、美しい日野の自然を紹介しながら、現在緑、野鳥、用水などのデータベースを作成し、その成果を環境マップにして市民の啓蒙を図り、今後の環境破壊を未然に防ぐ運動をすすめていることを報告した。

4番めの伊藤勲さん（NPO法人やまぼうし）は、障害者を特別扱いする政策よりも、健常者と同じ立場で就業支援、ワークシェアリングなど求人雇用の場を広げることがまちの活性化につながると訴えた。

最後に、茂木典子さん（潤徳小学校教諭）は日野の清流「浅川」を舞台にした「日野の水辺の楽校」を紹介し、四季をととした水遊びの楽しさが、子どもの情操教育に大きな効果のあることを話された。

以上の話題提供をふまえ、60分間の総合的な話合いに入った。

各プロジェクトにおける女性の割合、とくに財政問題に取り組む女性は皆無で、女性の視点が望まれること、ごみ袋の有料制に対する事業者の理解と協力、緑の保全に重要な農業における相続税問題、福祉サービスが人権侵害に結びつく危険性、子どもの水遊びに対する保護者の理解度など、さまざまな問題が論議された。

コーディネーターの荻原さんは、行政対市民、市民対市民、行政対行政の枠組みのなかで、それぞれがまちや人を育て、みんなでESDのプログラムをつくりましょう、評価をしましょうと結んだ。

まとめとして、中島政和さん（日野市地域協働課）は、社会を持続可能にするためには現在のすべての人びとに責任があること、地域を変えなければ東京、日本、世界は変わらないと力説された。

また、助言者として参加された森良さん（ESD-J理事）は、「意志ある個人」がESD活動の原点となること、各人がそれぞれの特技を生かして地域ごとのコミュニティーワーカーとなり、まちのなかに多くのサロンをつくるのが大切であると述べた。さらに、ESDのプロジェクトを達成するためにはボランティア、ファシリテーター、コーディネーターの3層を堅固に連結、構築すること、市民がもっと前にでる、そして探検、発見、放っておけんの3けん精神を忘れないようにとの助言を加えられた。

なお、今回のミーティングにはタイ国からアンパイ・ハラクナラックさん（タイ環境研究所）が参加され、最後にタイにおける環境問題について発表して下さった（101ページ参照）。

定刻どおり、ミーティングは盛会裏に終了し、その後約1時間歓談の機会をもった。

総合司会・報告：青木裏兎（日野市環境情報センター）

ESD 地域ミーティング in 泉北

開催日：2006 年 2 月 12 日（日）10:00 ～ 16:30

場 所：泉北環境整備施設組合泉北クリーンセンター（大阪府和泉市舞町 78）

主 催：NPO 法人 ダッシュ、ESD-J

協 力：世界人権宣言泉北 3 市 1 町連絡会

連絡先：NPO 法人ダッシュ 理事長：廣瀬聡夫 TEL：0725-46-3809 E-mail：hirose@npo-dash.org

参加者：80 名 行政と共に人権啓発推進協議会で活動している市民が多く、模擬店で市民団体・NPO 団体のメンバーに協力していただいた

プログラム： 10:00 ～ 11:30 基調講演「ESD と人権教育について」

講師・森実氏（大阪教育大学・ESD-J 理事）

11:30 ～ 12:30 施設見学（泉北 3 市の日常ゴミの焼却場）

12:30 ～ 13:30 （昼食）模擬店

パネル展 和泉市環境保全課作成の環境問題パネル

13:30 ～ 14:30 ワークショップ 1 「ESD に関わるワークショップ体験」

1 もし地球が 100 人の村だったら <ダッシュ>

2 環境問題を考える <いずみ環境くらぶ>

14:30 ～ 16:30 ワークショップ 2 「ESD の目標づくり」（全員参加）

■内容紹介

NPO 法人 ダッシュは、2005 年度の重点事業として、ESD 事業を取り上げ、独自の事業として、「愛・地球博」の視察、夏の開発教育全国研究集会への参加、地球温暖化防止に向けての講演会の開催、行政の環境基本計画の学習やゴミ処理場の見学などを行ってきた。そして、近隣の 3 市 1 町（和泉市・泉大津市・高石市・忠岡町）で継続して取り組んできた「世界人権宣言泉北 3 市 1 町連絡会」の今年度のテーマとして、この ESD を取り上げ、開発教育協会大阪事務所のご協力をいただいて、ESD についての講演会や連続 6 回の「世界の中の日本を考えるワークショップ」（「もし、世界が 100 人の村だったら」「貿易ゲーム」など）も 7 月から開催してきた。いわば、既存の人権教育のネットワークをいかして、そのなかで、これまでほとんど取り組めてこなかった環境問題にもアプローチし、ESD を位置づけようとしてきたのである。大阪では、豊中市の事例が有名だが、ある意味、大阪の北部にある豊中の事例に学びながら、大阪の南部でも、ESD の旗揚げをめざしたのである。

こうした 2005 年度のまとめのイベントが、2 月 12 日に泉北環境整備施設組合泉北クリーンセンターで行われた「ESD 泉北」地域ミーティングであった。当日は、ふだんから人権啓発事業をすすめている約 80 人の市民・行政関係者が集まり、以下の 5 本の柱からなるプログラムを行った。

①基調講演「ESD と人権教育について」

森実 ESD-J 理事の講演会。まず、ESD とはなにかが国連や日本の流れから説明され、人権教育や開発教育、環境教育、男女平等教育などの多様な内容を包含していることの説明があった。さらに、自己紹介も兼ねて、自分を表現する要素を見つけ、そのプラス面とマイナス面を話し合うというワークショップが行われ、参加者がうち解けた雰囲気をつくりだした。

②施設見学

泉北3市の日常ごみを焼却している泉北クリーンセンターの施設見学を行った。ごみの増加やダイオキシン対策の必要性から2004年に新しく改修された泉北クリーンセンターは、立派な設備はないものの、市民や学校の視察コースが設定され、今回、はじめて見学に来たという参加者が多かった。



③昼食

4つの市民団体が提供する模擬店でまかかった。

提供いただいたのは、国連識字の10年市民交流委員会によるバングラデシュカレー、地域福祉事業団体いずみフレンド館による信太うどん、在日本韓国民団泉北支部によるチヂミ、男女共同参画NPO法人フォーユー企画によるサンドイッチで、和泉市役所が作成した環境問題のパネルの並ぶ会場で、おいしく昼食をいただいた。ただ、この昼食を提供していただいた市民団体は、その準備や片づけなどで、地域ミーティングのプログラムには参加できず、専門性をもった市民団体の問題意識が、後のワークショップに反映できなかったのは反省点である。

④ワークショップ1「ESDに関わるワークショップ体験」

午後からは、この一年間で実施してきたワークショップなどの体験として、「いずみ環境くらぶ」によるディスカッションとダッシュによる「100人村」のワークショップを行った。参加者のなかには「動員」で来た人もおり、地元での一日とおしのイベントでは、よく途中で帰ってしまうということもあって、午後からは約40人程度となり、当初予定していた「人権」「多文化共生」のワークショップは中止となった。

⑤ワークショップ2「ESDの目標づくり」

最後に、全体で「ESDの目標づくり」のワークショップを行った。ESDについて、なにか特別なことを考えるのではなく、身近な日常の諸問題を取りあげようと、当日の参加者のつぶやきから拾った9つのテーマ（「子どもがあぶない」「ひとり暮らしのお年寄りが困っている」「公園がきたない」など）に分かれて、ESDの木をつくった。こうした身近なテーマで話し合うと、いろいろな経験やスキルをもった参加者の意見がでて、泉北の地で育ちうる9本のESDの木ができあがった。

■今後に向けて

今回の地域ミーティングでは、以下のような成果が確認できる。第1に、既存の人権教育のネットワークの輪が、環境問題に取り組む市民団体との交流にまで広がったこと。第2には、ESDがめざす、ただ学ぶだけではなく課題解決型の実践を伴う学習スタイルが、これまでのマイノリティの問題を知るという形に終わりやすかった人権教育の弱点の克服に大きな示唆を与えたこと。第3には、泉北にあるさまざまな課題を解決していく「ESDの木」ができあがり、これをいかに地域のネットワークで解決していくかというように、ESDが身近な問題に引き寄せられたこと。そして第4に、人権教育の推進をミッションとして地域で活動するダッシュとしては、ESD-Jに参画したことで新しい多くの出会いがあったし、逆に人権や国内の識字問題をESD-Jのなかに発信する役割を再確認しえたことである。いうまでもなく、ESDの取組みは、これまでのさまざまな取組みをつなげて、再構成しながら、今はじまったばかりである。今後の「10年」のなかで、こうした課題をさらに深めていきたい。

報告：廣瀬聡夫（NPO法人 ダッシュ）

ESD 地域ミーティング in 香川

開催日：2006 年 2 月 19 日（日） 13:00 ～ 17:00

場 所：土庄町中央公民館 3 階講座室（香川県小豆郡土庄町甲 620）

みんなで考えよう、手をつないで未来をつくろう

主 催：NPO 法人 いきいき小豆島

共 催：ESD-J

協 力：えひめグローバルネットワーク、（財）香川県国際交流協会

連絡先：NPO 法人 いきいき小豆島 代表：萩本篤義

TEL：0879-61-3577 E-mail：atyshgmt@nifty.com

参加者：30 名（ほとんど小豆島に関係のある方でボランティア団体と環境に興味のある方）

プログラム：	13:00 ～	主催者あいさつと ESD についての話
	14:00 ～	環境省からの話
	14:30 ～	グループ討議（4 グループに分かれて）
	15:30 ～	グループごとの発表会
	16:00 ～	全体懇談会
	17:00	終了

■内容紹介

1. 主催者のあいさつ

主催者側からのあいさつとして、ESD 地域ミーティング開催の趣旨説明と今回の司会や出席者の説明、当日の予定について説明。

2. ESD-J 全国ミーティング参加報告

NPO 法人 いきいき小豆島の今川氏から 2 月 5 日の ESD-J 全国ミーティングに参加した報告が行われた。

ESD は想像以上に大がかりな取組みであり、今後の大きな課題であることがわかった。

分科会では、ツーリズム・森林のグループに参加。小豆島の ESD の現状では、観光全盛期から 40 年経った今日、自然破壊がすすみ観光客も激変したことを報告した。

今後、行政の縦割り組織の改革から、10 年先 20 年先を見据えて連絡会議を推しすすめるための強力な指導者の必要性も論議された。

3. ESD-J の説明

えひめグローバルネットワーク代表の竹内よし子氏から、環境問題は公害の防止からはじまったので経済活動と対極に位置されてきたが、持続可能な開発をすすめることで「本当の幸せとは？」という視点から長期的に安定した経済活動も視野に入れた ESD を構築する必要があるとの説明があった。

国連の「〇〇の 10 年」の提言と、今回の「持続可能な開発のための教育の 10 年」のちがいは、日本政府と NGO 団体が共同で国連に働きかけてできた点である。今回の国連キャンペーンでは、市民レベルでの活動においても実現させるところが、とくに重要であるとする。

現在のESDに関する活動は、全国的な組織の構築と、地域で活動する組織のネットワーク化、学校や行政と協力してすすめる土壌、の3点ができつつあるので、香川県で初めて開催するこのESD-Jから香川・四国・全国に発信してほしいとの発表があった。

その理念は、人間が人間として生きていくための尊厳でなければならないので、ぜひ、将来の市民としての子どもたちも参画させてすすめていきたい。



4. 環境省の話

環境省中国四国地方環境事務所の高松事務所長と荒木真一保全統括官は、現在の環境省の組織の説明（自然保護と廃棄物や温暖化対策の2つの組織の統合）と、四国のなかで環境に関するパートナーシッププラザの設立に力を入れ、共同して環境の問題に対応したいとのお話があった。

5. 外国のESDの取組みについて

えひめグローバルネットワークの林知美さんから、韓国ほか東南アジアのESDの現状について話があった。

6. グループ討議

これまでのESDの説明から、小豆島のESDについての意見交換を4グループに分けて行い、グループ内で発表者を決めて発表してもらった。

環境の整備と観光の活性化についての意見や、情報の活用と情報の発信についての意見が多かった。

7. 自由討議

山野草の専門家、英語のキャンプの仕掛け人、瀬戸塾の世話係、高校の校長、海のボランティア会長、シーカヤックのネイチャーガイド、有機農法の実践者、など多才な方から活発な意見が続出して次回のESD開催に向けて閉会した。

■今後について

行政や学校関係者および地域のボランティアグループなどに案内して幅広い参加者で構成できるESDミーティングをめざしたい。

そのなかでなにができるか、どんな期待効果が望めるかなど、より具体的な取組みを課題にミーティングをしたいと思う。

ESD ミーティングの副題として、もう少しわかりやすい表現も折り込みたいと思う。

報告：萩本篤義（NPO 法人 いきいき小豆島）

ESD 地域ミーティング in 徳島

開催日：2005 年 6 月 4 日（日）13:00 ～ 16:00

場 所：徳島大学 総合科学部・共通教育講義棟（徳島県徳島市南常三島町 1-1）

地球が“せこい”！？ いま地域から国際協力を
～持続可能で公平な世界をつくるため四国からできること～

主 催：四国 NGO ネットワーク（SNN）

共 催：外務省、ESD-J

後 援：徳島県、香川県、愛媛県、高知県、徳島県国際交流協会、香川県国際交流協会、愛媛県国際交流協会、
高知県国際交流協会、JICA 四国支部、徳島新聞社、四国放送、あわわ、月刊タウン情報トクシマ、
徳島大学

連絡先：四国 NGO ネットワーク 担当：林知美 E-mail：shikoku_ngo@yahoo.co.jp

参加者：80 名（学生・学校関係者・NGO・JICA など）

プログラム：1. 開催挨拶 竹内よし子（SNN 代表、ESD-J 理事）、黒田康弘（徳島大学副学長）

2. 基調講演 伊藤康一（外務省国際社会協力部地球環境課課長）

3. パネルディスカッション

パネリスト：吉田修（NPO 法人 TICO 代表）

蓮井孝夫（NPO 法人 香川国際ボランティアセンター 副理事長兼事務局長）

林知美（愛媛大学農学部 4 年）

坂山英治（国際理解の風を創る会会長）

司会：饗場和彦（徳島大学総合科学部助教授）

4. 閉会挨拶

■ 内容紹介

○ 基調講演

国際社会の地球温暖化防止に関する取組みとそのなかの日本の役割について、警告的な数字・データをとおしての地球環境問題の現状、環境サミットと条約、ミレニアム開発目標、ESD のはじまり、G8 における取組み、環境保護に関する国際的枠組み、日本政府の取組みといった具体的な説明が行われる。

また、途上国のガバナンスの問題や、環境問題の議論の前には「貧困」という大きな壁が立ちだかっている現状があるという指摘もあり、政府という立場で条約交渉を行うことは、わずかなことであると感じているが、さまざまな地域に講演会にでかけ、実際に地方での NGO 活動や学校の取組みに触れることで地球環境問題の解決への実感をもつことができる、まさに「地球規模で考え、地域社会で行動しよう（Think globally, Act locally）」の大切さを感じているとのコメントもあった。

○ パネルディスカッション

伊藤氏の基調講演を受け、国際政治の重要性を意識しつつも、市民レベル・草の根レベルの視点を持ち行動することの大切さを各パネリストの活動をとおして議論する。

まず、吉田氏より青年海外協力隊やアムダ、現在のTICOでの経験から、とくにアフリカ支援ではひとつの地域に対して農業・水・保健衛生・教育の包括的なアプローチが必要であること、またアフリカの早魃やAIDS、絶対的貧困という現実と、日本人の豊かな生活のあり方のギャップについての問題提起があった。今の日本のような資源を浪費する生活は将来続かない、持続可能な生活をしていくには、むしろ田舎のほうが有利であり、本当の持続可能性を創り出すためには、日本の大量生産・大量消費・大量廃棄の現実を変革することも必要という発言があった。



次に、蓮井氏よりNPO法人香川国際ボランティアセンターが行うラオスでの活動紹介と開発や国際協力のあり方についての提言があった。支援しているラオスでは未熟児はゴミ袋に入る現実もある。国際協力はまず知ること、そして動くこと。それにより自分を変革していく、自分から変わることが可能になるだろうという発言があった。

林氏からは、えひめグローバルネットワークの活動紹介と愛媛大学からのインターンとしての関わりについて。関心のある学生は多いものの、いざ行動するのはむずかしいもの、入っていきやすい「場」の提供が必要ではないだろうかといった提案や、愛媛大学で開催された四国NGOネットワーク主催の国際協力論についての紹介があった。

坂山氏より国際理解教育・開発教育と現実問題の結びつき、教育の大切さについて実践事例をとおして紹介があった。小学生に途上国の人びとの生活のようすを紹介すると、「貧しい」ではなく「ムダがないね」と答え、その純粋さにむしろ教えられることが多いという。

たしかに、見ず知らずの遠い外国に、なぜわざわざ支援、協力するのかという疑問もあるが、パネル討論で示された一つの考え方は、結局、国際協力は他者ではなく、自分に返ってくるものが大きいという点であった。そうしたブーメラン効果は、徳島という地域の活性化にもつなげていけるのでは、と締めくくられた。

■今後に向けて

タイトルの「せこい」には阿波弁で「疲れる」の意味がある。自然破壊、環境汚染がすすんでいるありさまは、まさに地球がしんどくなっている状態。また、「せこい」は一般的には「ずるい」の意味で使われるが、先進国と発展途上国の格差が広がり、餓死者がいまだに絶えないといった問題は、世界が不公正なしくみになっているからともいえる。

こうした問題は、地球規模の大きな話だが、でもなにか徳島、四国という地域から行動できることがあるかもしれない。政府に任せず一市民としてなにかできないだろうか。そんな問いかけを自問する人には、ヒントが得られる機会となったであろう。

報告：林知美（四国NGOネットワーク）

ESD 地域ブロックミーティング in 東海

開催日：2005 年 12 月 18 日（日） 10:00 ～ 17:00

場 所：新東通信（株） 会議室（愛知県名古屋市中区丸の内 3-16-29）

持続可能な社会をつくる「教育のしくみ」を探るつどい もっと未来へ

主 催：環境省

協 力：ESD-J、エコプラットフォーム東海／中部環境パートナーシップオフィス

参加者：66 名（内ゲスト：15 名 スタッフ：10 名）

プログラム：

1. あいさつ 上原裕雄氏（環境省中部地方環境事務所長）

2. 話題提供 阿部 治氏（ESD-J 代表理事、立教大学大学院教授）

「今後の ESD の展開～持続可能な社会をつくる教育をどのように具現化するのか」

3. ラウンドプレゼンテーション「持続可能な社会をつくる "教育のしくみ" を探る」

コーディネーター：千頭聡氏（日本福祉大学情報社会科学部助教授）

コメンテーター：上原裕雄氏（環境省中部地方環境事務所長）

阿部治氏（ESD-J 代表理事、立教大学大学院教授）

村上千里氏（ESD-J 事務局長）

①はじめの一步：ESD ってなんだろう 肥田幹子氏（ESD in 三重）

②プログラム：持続可能な社会をつくる学習内容・教材とは 市川恵氏（NPO 法人 名古屋 NGO センター）

③次世代：次代を担う若者と ESD 蒲勇介氏（オルガンデザイン室代表、伝統工芸プロデューサー）

脇田裕子氏（愛知淑徳大学文化創造研究科学生・2004 年度損保ジャパン環境財団 CSO ラーニング生）

④学校：学校教育における ESD の位置づけ 清水治代氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）中部国際センター）

⑤地域：ESD が地域に広がるために必要なこと——先進地に学ぶ

奥田陸子氏 / 小島千春氏（NPO 法人 こども NPO）

竹内よし子氏（NPO 法人 えひめグローバルネットワーク代表、ESD-J 理事）

⑥モデル：ESD 的に事業を展開する——なごや環境大学・豊中市を事例にして

池田満之氏（岡山ユネスコ協会理事、ESD-J 副代表理事）

鬼頭秀一氏（名古屋市環境局環境都市推進課）

4. ミニ・プレゼンテーション「中国と日本をつなぐ環境教育教材」

船橋康貴氏（（株）フルハシ環境総合研究所取締役社長）

5. ワークショップ「2010 年、2014 年までに実現すること～課題の抽出と行動計画づくり」

6. 全体会 グループごとの発表・共有

7. 交流会（17：30 ～ 19：00）

■内容紹介

東海地域（愛知・岐阜・三重）においては、2003 年に ESD 地域ミーティングを開催したが、そのさいには「環境」をおもなテーマに実施したため、今回は「開発教育」「次世代」をキーワードに、学生など若い世代を中心に準備をすすめてきた。また新しい出会いと、継続的にすすめていく「組織」を立ち上げるきっかけの場づくりとなった。

はじめに主催者である、環境省中部地方環境事務所長の上原氏より、盛況に幕を閉じた愛・地球博に続く形

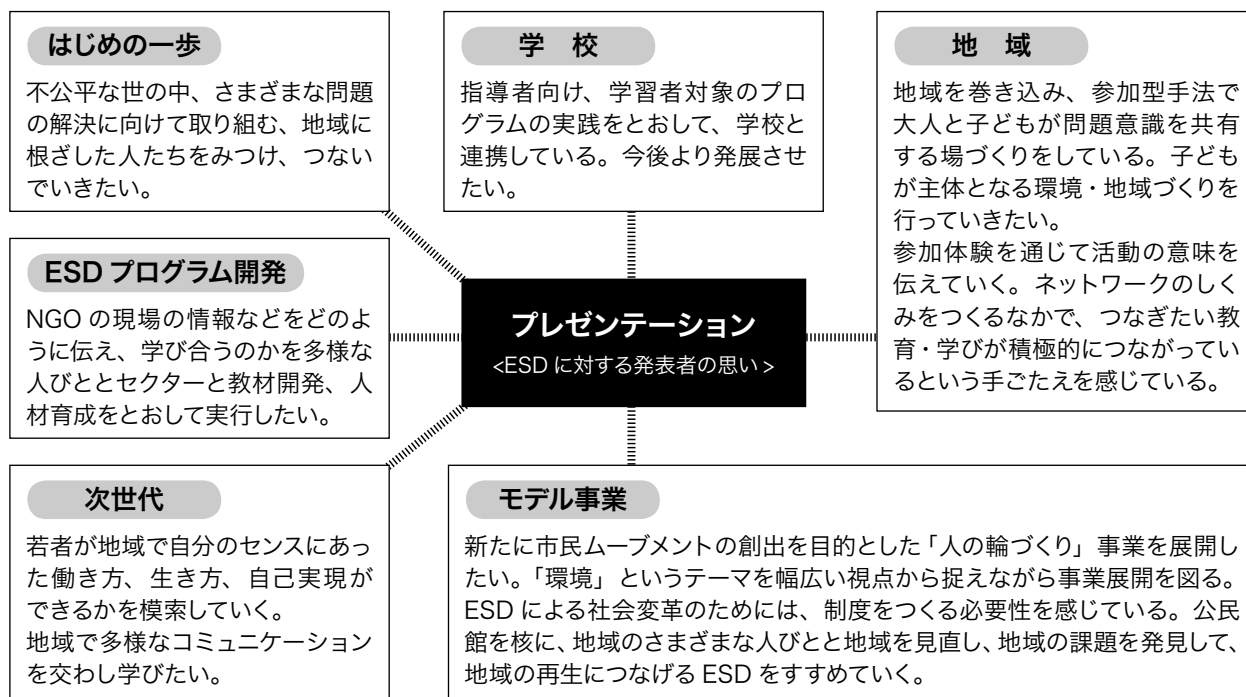
愛知・岐阜・三重 東海地域 ESD-T キックオフ!ミーティング

で「持続可能な開発のための教育の10年キャンペーン」がすすめられると、万博で培ったノウハウやネットワークの活用ができる、など提案をいただいた。次に、ESD-J 代表理事である阿部治氏から「ESDの10年」の経緯や現在の状況の説明があり、重要なのは「地域のための地域による日常的具体的実践活動、対話や参加の学びの活動」であることが示され、ESDの10年というのは、「新たな未来を描くための共通の価値観をもち、私たち自身が元気になっていく教育活動」であることが話された。

その後、「ESDはじめの一步」「ESDプログラム開発」「次世代」「学校」「地域」「モデル事業」という6つのキーワードにもとづき、東海地域で活躍されている7名の方の報告と愛媛県、岡山県の実践されている先進事例が紹介された。

午後最初は、(株)フルハシ総合研究所社長の船橋康貴さんが作成された、中国と日本をつなぐ環境教育教材の紹介があり、海外との協働という視点の重要性も確認された。

その後、現状における課題抽出と2010年、2014年までの行動計画づくりワークショップを各テーマで行い、非常に短い時間であったが、熱く意見交換した。(次ページ表参照)



■今後に向けて

今回の参加者の関心度はかなり高く、国連による ESD の 10 年キャンペーンの具体的展開が垣間みられた。国際的な動き、国内の動き、他地域の動きの報告をうけ、地域になにが求められているのか、地域こそが原動力になるということを参加者全員が認識できたと思う。今後いかにつながり、ノウハウや智恵をもち寄り、この地域ならではのアクションを創出していくかが重要課題となる。今回集ったメンバーがよりモチベーションを高め、より多くの市民への普及・啓発、パートナーシップによるしくみづくりへと展開できよう、核となる運営部隊を充実させていきたい。

報告：新海洋子（地域 PT）

ESD 地域ブロックミーティング in 東海

【2014 年までの目標設定・実現するための意見交換】

テーマ	2014 年までの目標	議論の内容
普及・啓発	一人ひとり、世界みんなが元気になる。	2014 年には、一人ひとり、世界みんなが元気になるという目標を掲げ、どうしたらよいかを話した。元気になるためには、コミュニケーション力・地域力・ESD 力の UP、組織や場の変革が大切であることが話された。あいさつをする、顔の見えるつながりをつくるなど、すぐに実行できることも提案された。また、個々の立場を理解する、万博のつながりを大切にするなども大切なポイントとして共感を得た。
プログラム・教材	2010 年目標 ①行政への提言・アドボカシーを行う。 ②ビジョンやファンドをつくる。 2014 年目標 ①市民が学習のづくり手、主体となる。 ②市民のエンパワーメント。	プログラムを作成する土壌となる環境、基盤づくりについての意見が多く出た。5 年後のビジョンとして、行政への提言・アドボカシーを行う、共通のビジョンづくり、コミュニティづくり、教材づくりと人づくりのファンドをつくるなどが提案された。10 年後には市民が学習のづくり手、主体となる、市民による ESD センターを運営し、市民がエンパワーメントすることによって社会が変わるというビジョンを描いた。
次世代育成	価値観（自己実現や夢への強迫観念）を変える。	若者の視点で、若者に起こっている問題点とその対処法を考えた。働くことに夢や希望がもてないことが問題で、職業教育、インターンシップを行い、所得額を次第に上げてやりがいのある仕事を任せることが挙げられた。また、自己実現をしなければいけない、夢をもたなければいけないという強迫観念にとらわれている価値観を変えること、一次産業やエコ就職を支援し、かつこい働き方だと価値観を変換することが挙げられた。漠然と将来に不安があるということに対して、流行やメインストリームに乗らなければいけないという思いや、自分に自信がない、あきらめや意思の弱さ、家庭内の問題が要因ではないかという話がでて、精神的なケアやサポートが必要であるなどの意見がでた。
学校教育	ESD を定着させるための提案 ①教員向けの ESD 学校をつくる。 ②教員向けの ESD 研修を実施する。 ③廃校を活用して全国の児童・生徒に ESD を実施する。	総合的な学習の時間と ESD とのつながり、また、それを行う教員のコーディネート力やファシリテーションなどに注目して話し合った。総合的な学習や ESD を取り入れたことによる学力向上という点においては、その変化を見極めて保護者の理解を得ていくことの重要性について話した。総合的な学習に関心を寄せる教員を集めた学校をつくり、モデルケースとして学校教育に ESD を取り入れたらどのような効果が得られるかを探り、得られた効果を文部科学省などにアピールしていくというアイデア、教員のスキルをバックアップするために、ESD の考えを取り入れた研修を実施することなどが提案された。 地域との連携においては、中山間地や市町村合併などにより廃校になった校舎を活用し、全国から生徒を呼び ESD を取り入れた教育を実施するという提案がだされた。
地域	ESD 情報を発信して、近所の人が家族のように声をかけ合うまちづくりを実現する。	地域には旧住民と新住民、行政と住民の対立などの問題があるが、2014 年までには ESD 情報をわかりやすく発信して、住民によるルールづくりと自主管理による楽しいコミュニケーションの場づくり、住民主体で誰もが参画できるまちづくり、近所の人が家族のように声をかけ合うまちづくりを実現したい。 そのときのキーワードは、子ども主体、子どもから学ぶ地域改善、コミュニティワーカーがいること、家から歩いて 5～10 分で顔がつながる、出会える地域範囲が望ましいことなどが話された。
モデル	①さまざまな人が一体感をもてるような地域づくりのしくみをつくる。 ②地域コーディネーター、ESD インストラクターによって、全市民が ESD を実施するしくみをつくる。	ESD 的に事業を展開して、互いのよいところを伸ばし合いカバーし合うことを考えていくことを前提として、個人や個人が所属する組織の強み、弱みを話し合った。現在は縦社会から横社会に移行する「斜め社会」である。みんなが地域を支えていくような形が 10 年後の地域像ではないだろうかという意見が挙げられた。 安心できる町、地域の子どもの可能性、金や暮らしの知恵をつなぐ役割が必要である。ESD 的に事業を展開するには、どのような事柄でも ESD であるということを位置づけて、さまざまな人が一体感とゆるやかなつながりがもてるような展開を行えばいいのではないかと。 また、個人や組織の強みと弱みを踏まえて戦略的にどう推進するかをまとめ、政府にアプローチしたり、市民パワーで ESD を明確に認知させていくという意見が挙げられた。地域コーディネーターが、地域資源などの基礎データを伝える役目となり、そのなかで ESD インストラクターが育っていくことが将来像。ESD を全市民に実施するしくみづくりになるのではないかなどが話し合われた。

ESD 地域ブロックミーティング in 北信越

開催日：2005 年 12 月 23 日（祝） 9:30 ～ 17:00

場 所：富山県総合福祉会館・サンシップとやま（富山県富山市安住町 5-21）

ESD ～手をつなごう！風をおこそう！

目 的：ESD の 10 年を周知し、ほかの地域ではじまっている ESD の取り組みを知り、地域における ESD の展開像や推進方策を考える契機とするため、北信越地域における ESD の担い手や推進組織が一堂に会する機会を提供することを目的とした。

主 催：環境省、ESD-北信越ブロックミーティング実行委員会

共 催：NPO 法人 エコテクノロジー研究会

後 援：福井県、富山県、石川県、新潟県、長野県、福井県教育委員会、石川県教育委員会、富山県教育委員会、長野県教育委員会、石川健民運動実施本部、JICA 北陸、とやま環境財団

協 力：とやま国際理解教育研究会（TIE）、AJA FOUNDATION、日本ボーイスカウト富山県連盟、NPO 法人 いしかわ自然体験支援隊、ESD 研究会金沢、あそあそ自然学校、とやま起業未来塾コミュニティビジネスコース、環境教育ネットワークとやまエコひろば、アースデイとやま、富山 YMCA、いしかわ地球市民の会（いーち）、ホールアース自然学校ほか

参加者：95 名（事前申込 94 名＋当日飛び込み 13 名－大雪のため当日キャンセル 12 名）

プログラム：

1. はじめに（ESD-北信越ブロックミーティング実行委員長 伊藤通子）
2. 主催者あいさつ（環境省総合環境政策局環境教育推進室長 渋谷晃太郎氏）
※雪で航空機欠航のため欠席となり、代読 ESD-J 事務局長 村上千里氏
3. 講演「ESD の今～地域の取り組み事例、岡山より～」池田満之氏（ESD-J 副代表、岡山ユネスコ協会）
4. 第 1 セッション：円卓討論会 ―持続不可能性をあぶりだし、現在の課題と 10 年後の着地点を見出す―
ファシリテーター：敷田麻実氏（野生生物保護学会会長、金沢工業大学教授）
討論者
 - ・地 域：辻英之氏（NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター専務理事）
※雪で列車が遅れ、森良氏が途中まで代役
 - ・環 境：高橋久氏（NPO 法人 河北潟湖沼研究所 理事）
 - ・福 祉：野入美津恵氏（富山型デイサービス「おらとこ」理事長）
 - ・国 際：朝比奈裕子氏（とやま国際理解教育研究会代表、AJA-FOUNDATION 代表）
 - ・子ども：早川たかし氏（NPO 法人 富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊理事長）
5. 第 2 セッション：ワークショップ ―ESD の 10 年、我々は何をすべきか―
第 1 セッションから抽出されたテーマ「ネットワークづくり」「参加のしくみづくり」「自立のしくみづくり」「経済的にも持続可能な地域づくり」の 4 グループに分かれて、今後 10 年の活動指針をつくった。
アドバイザー：森良氏（NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター代表）
村上千里氏（ESD-J 事務局長）ほか
6. 第 3 セッション：全体会 ―ESD-H 10 年 宣言をつくる―
7. 交流懇親会
8. その他 12 月 24 日（土）9:00 ～ 12:00 北信越地域担い手会議

ESD 地域ブロックミーティング in 北信越

■ 内容紹介

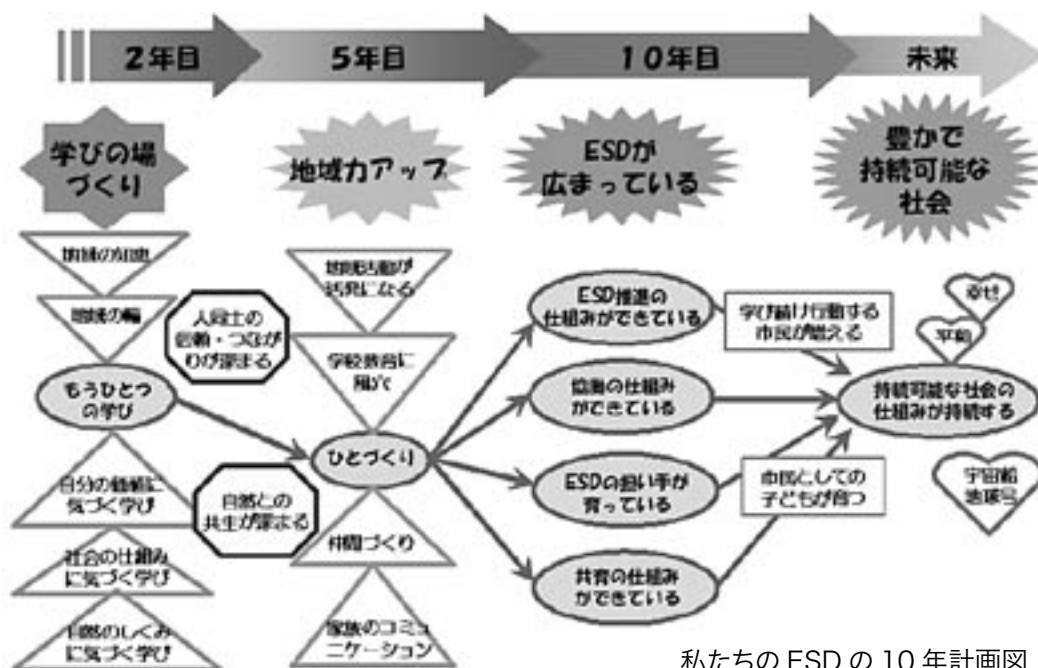
2005 年からはじまった国連による ESD の 10 年を、わが北信越地域において推進するのか？ “ESD= 未来をつくる教育” をかたちづくる試みに日本のさまざまな地域や世界の人びととともに取り組んでいくには？ そんな課題に向けて、私たちは実行委員会方式で地域ブロックミーティングを開催し、その後も継続的に活動をすすめるべく、ESD-J 北信越（ESD-H）ネットワークを立ち上げることとなった。

最初に成果を述べると、企画段階での話合いのなかから、「ESD の 10 年計画図」や「棲みなおす」というキーワードが生まれ、また当日の参加者でつくり上げた「ESD-H10 年宣言」という成果物（これからの活動指針）を得て、北信越地域での 10 年のスタートを切ることができたのである。以下に、実行委員会のすすめ方や、当日のようすをレポートする。

○ 実行委員会は、参加型・合意形成型で

多分野、他地域から実行委員が集まった（登録は約 30 名）ことで、実行委員会は、参加型・合意形成型の会議ですすめられた。会場も、石川県や全県下から誰もが集まりやすいようにと、富山市や高岡市で開いた。メーリングリストやブログも開設、ML では情報交換（3 ヶ月で約 700 通）を主とし、議論は顔を見ながら……を基本にすすめた。

実行委員会を結成してまもなくのころ、参加型会議で徹底討論をして「ESD の 10 年計画図」を作成。10 年後に ESD が広まった状態、それは「ESD を実践するためのしくみが地域社会のなかに生まれはじめている」という着地点をイメージすることとした。その実現のために、この事業は、私たちをとりまくさまざまなヒト・モノ・コトを“もう一度つなぎ直し”、“棲み続けられる地域・地球のための知恵を創出する” そんな学びを提案し、実践していこうという動きのはじまりと位置づけ、チラシのキャッチコピーは、「ESD ～手をつなごう！ 風をおこそう！」とした。



準備をすすめるなかで、実行委員会での話し合いから生まれた、「棲みなおす」という考え方が、これから地域でESDを実践していくためのキーワードになっていくのではないかと、私たちは考えている。

○大雪にもかかわらず100人近くもの参加者が

当日は、大雪のせいでハラハラドキドキ、主催者や討論者がたどりつけないアクシデントもあるなか、どうにか目標としていた成果である、ESD-北信越の10年宣言（活動指針、次ページ参照）が一応の形になった。なによりも、悪天候にもかかわらず、北信越各県から100人近くもの多様な参加者が集まったことは、ESDの可能性を感じさせるものだった。しかし、本当に社会のなかでESDのしくみを創ることを仕掛けていくためには、内容面での力不足を感じたところが多々あり、今後の課題として残った。



○翌日、北信越の担い手会議を開催

ミーティングでは参加者が手をつなぎはじめ、そして、ゆらゆらと風がおこりはじめたことを実感できた。次は、点を線に、そして面へと広げていかなければならない。北信越5県の担い手が顔を合わせることで、そこで議論したときに生まれるアイデアにそのヒントがあるはずと、各県のキーパーソン1、2名に出席を依頼し、翌日に担い手会議を開催。ミーティングに集まった人たちにも、広く会議への参加を呼びかけた。結果的に、5県から20名近くの有志が集い、活発で楽しい担い手会議となった。

その場で、ESDに関する北信越のネットワークを結成することが合意された。

○「ESD-北信越ネットワーク」の今後

地域ブロックミーティングの開催準備をする過程で、行政との間に信頼関係が生まれ、日本政府もようやく動きだした、との朗報。これは今後のESD-Hの活動にとって心強い動きだった。地域でESDをすすめていくには、行政や教育現場との協調関係は欠かせない。うまく地域づくりのパートナーになり得るかどうか、大切なポイントである。そのうえで、影響を及ぼし合う関係、学び合う関係をつくっていかねばならない。

ESD-H、広域の担い手がお互いの顔を見ながら議論できる「場」づくりのために、まずは資金が必要ということで、助成金申請から活動をはじめている。12月の会議でみんなから出たさまざまなアイデア～各県持ち回りのミーティングの開催、北信越ESD温泉ツアー、勝手にESD顕彰、ESDダッシュ村計画などの楽しい仕掛け～を一つひとつ実践していくことが、北信越での動きを活性化していくための入り口だと考えている。

担い手がつながりエンパワーされ、ESDの実践がみえてくること。そして、地域や組織が変わりはじめたという実感、どんなに小さくても実感を得られること。そのきっかけづくりをESD-Hができればと思っている。

報告：伊藤通子（地域PT）

ESD- 北信越 10 年宣言（改訂版）

今から 10 年後の 2014 年、私たちを取り巻くさまざまなヒト、モノ、コトを“もう一度つなぎ直し”、“棲み続けられる地域・地球のための知恵を創出する”学びが行われていることをめざして、次の取組みをはじめます。

第 1 章 私たちは、みんなが参加できるしくみをつくります。

- ① 対話のできるコミュニティをつくる。（例：地域を散歩して地域のことを学ぶ）
- ② 参加のきっかけをつくる。（例：ESD-H が情報の発信母体となる）
- ③ 参加を継続させるしくみをつくる。（例：協働の技術・対話の技術を学ぶ）

第 2 章 私たちは、自立的依存も含めて地域の自立をすすめます。

- ① 社会を変えていくために、まず自分が変わる。
- ② もともと地域にある ESD 的な活動（地域の宝）をクローズアップする。
- ③ 地域の政治（公的なしくみづくりの場）に参加する人を増やす。（まずは選挙に行こう）

第 3 章 私たちは、参加・循環・自立型の経済をめざします。

- ① ESD ファンドをつくり、活動を側面から支援する。
- ② ESD 的な活動をしているモデル地域（ESD 村）の宣伝、紹介、体験学習をすすめる。
- ③ 経済を環境重視のシステムに変えていく。

第 4 章 私たちは、ネットワークで学び、社会を変えます。

- ① 実質的に協働するネットワークをつくる。
- ② ネットワークをスパイラル的に発展させる。
- ③ ネットワークが常に動いていることを意識して活動する。

ESD-J 全国ミーティング 2006

「未来をつくる教育」をつくる

昨年9月、ESDの10年に向け国際実施計画が採択され、ようやく日本国政府もESDの推進に向けて動きはじめました。ESD-Jでは、この動きを加速させるべく、政府・地域・NPO・海外のESDの取り組み状況を共有・交流する場として「ESD-J全国ミーティング」を開催。定員120名に対し、ESD-J会員および行政、企業、教育関係者などの関係者約180名が参加し、ESDにかかわる人・関心をもつ人が確実に増えはじめているのを実感しました。

今年は、ゆっくりとしたランチ＆交流タイムをとり、ESD-J会員団体などによるポスターセッションや資料販売の場も設けました（次ページ参照）。環境、開発、人権、子育てなど、さまざまな団体で、すでに取り組まれている教育活動の「今」を共有する場となり、参加者それぞれが自分の活動・関心との関連で、より具体的なESDのあり方・方向性などを見とおせたのではないのでしょうか。今後のESDに向けた新しい連携や協働が生まれていることを望みます！

また、現在政府が作成に取り組んでいる「ESD国内実施計画」に対するインプットの検討セッション、ESD-Jのプロジェクトチーム（PT）活動に分かれた分科会でも、活発な議論が交わされました。

3つの事例紹介については、①米国バーモント州の取り組み（20ページ）、②東京都杉並区の取り組み（22ページ）、③北信越ESDブロックミーティング（86ページ）をご参照ください。

報告：野口扶弥子（ESD-J事務局）

プログラム

- | | |
|-------|--|
| 10:00 | 主催者挨拶 |
| 10:10 | 基調報告：日本政府の取り組み
文部科学省 井上正幸国際統括官 |
| 10:30 | 事例紹介1：米国バーモント州の取り組み
シェルバンファーム・ディレクター ジェン・シリロ氏 |
| 11:10 | 事例紹介2：学校と地域をつなぐしくみづくり
東京都教育庁生涯学習スポーツ部 梶野光信氏
NPO法人スクール・アドバイス・ネットワーク 生重幸恵氏 |
| | 事例紹介3：地域の動きを生み出すネットワークづくり
北信越ESDブロックミーティング 伊藤通子氏 |
| 12:05 | オリエンテーション |
| 12:15 | ランチ交流会 |
| 13:00 | ポスターセッション
(ESD関連機関、ESD-J会員団体による活動紹介) |
| 14:00 | 国内実施計画へのインプット内容議論
環境省総合政策局環境教育推進室 渋谷晃太郎氏 |
| 15:00 | 分科会：ESD-Jの2006年度の活動をつくる
各プロジェクトチームからの活動報告
プロジェクトチーム別分科会 |
| 17:00 | 終了 |



「未来をつくる教育」をつくる ESD-J 全国ミーティング

2006年2月5日（日）
10:00～17:00

JICA 国際総合研究所 国際会議場

主催：NPO法人「持続可能な開発のための
教育の10年」推進会議（ESD-J）

1. あなたの活動にとって、ESD とはなにですか？

子どもと大人がともに学ぶもの / 教育をすすめるうえでの考え方で、人それぞれ違ってよい。人を育てて、人をつないでいくこと / 私たちの原点であり、同時に未来の課題 / 市民のエンパワーメント / いのちを育むこと / 自分の活動を教育の現場につなげる道筋 / 未来をつくる運動 / 大きなひとつの森をみんなで育てているようなもの / 人間とほかの生物がともにある未来のための活動・・・など

2. ESD に対する思い・期待があれば、教えてください

個々の別々な活動が結びついて、盛り上がり、国を動かす力になればよい / 今までつながらなかった人とつながったり、地域で人材が育つことが ESD で可能になっていく / 世界共通のビジョン。それに世界の人に向かって心を合わせのお手伝いをしたい / 何十年たっても、次世代になってもよい日本になる社会づくり / 自分の活動分野の問題解決には、いろんな分野の人たちとの連携が必要で、いろんな人たちに会うきっかけがあればいいと思う / 子どもたち全部に ESD の機会があるようがんばりたい / 世代間・地域間の格差の公平を、世界のどこでも実現することを大事とする価値観を、世界のどこでも学べるもの / やりたいからやっている以上のもの / 今の状況を変える仕掛けになるとよい・・・など

ポスターセッション

ブースハイインタビュー

出展いただいた団体の展示員さんに突撃インタビューを決行！ 実践者の思いや期待をうかがいました。

出展団体

(財) キープ協会
(財) 日本自然保護協会
(財) ボーイスカウト日本連盟
(財) ユネスコ・アジア文化センター
(社) ガールスカウト日本連盟
(社) 日本環境教育フォーラム
(社) 日本ネイチャーゲーム協会
(社) 日本ユネスコ協会連盟
(社) 農山漁村文化協会
NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター
NPO 法人 えひめグローバルネットワーク
NPO 法人 自然育児友の会
NPO 法人 人権 NPO ダッシュ
NPO 法人 生態教育センター
NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センター いばし
アースビジョン組織委員会
AGS-UTSC サステナビリティ教育ワーキンググループ
岡山市役所
岡山ユネスコ協会
環境・国際研究会
グリーンクロスジャパン
国連大学高等研究所
自然文化国際交流協会
仙台いぐね研究会
東京電力(株)
(株) 日能研
ESD-J 国際ネットワークプロジェクトチーム
ESD-J 地域ネットワークプロジェクトチーム

3. ポスターセッションに参加した感想をお聞かせください。

それぞれの場所・それぞれの活動があるが、つながることでおたがいのエネルギーを補完し合えた / 私たちがやっていることがいろんな人の活動とつながっていることを実感 / 自分の活動分野は、ESD のなかでマイナーなので、プレゼンスを高めたい / 物を介してではなく、今日のように、話をして伝える機会は大事 / 具体的に活動をしていない人にとって、ESD はハードルが高くみえるということに気づいた / ESD の資料をほかの国の言葉ではなく、現地の言葉でつくる努力が必要 / 自分たちの活動を、身近なものとして話を聞いてくれた方が多かった・・・など

